

今この件の金と布とを吉野まで運送せんに道中幾十数の従者を要するや。搦て汝が望に任せん宣致定むべし。と亦他事もなく急れて朱之介は脱るゝ路なく雲時頭を傾けて。逆旅に多人数なるものは遣て人に怪られて障りになる事候べし。有徳ば布とおん金は韓櫃二前ばかりに蔵めて是を昇もの七八名。別に室領一名を添られなば、足るべうもや候はん。扱某は山伏の峯入するごとく打扮て大約這八九箇の従者を得て路を急がば誰か怪みて禁むべき。輒く那地へ到らんこと何の疑ひか候べき。この義は御心やすかるべし。と憚る所もなくまうししかば朝興のぬし太く感じて。連微妙く計りけり。

次に水滸伝第十六回を見ると。

楊志又稟道。若依小人一件。事便敢送去。梁中書道。我既委任你身上。如何不依你説。楊志道。若依小人説時。並不要車子。把礼物都製做十余条担子。只做客人的打扮行貨。也点十箇壯健的願禁軍。却装做脚夫挑着。只消一箇人和小人去。却打扮做客人。悄悄連夜送上東京交付。無地時方好。梁中書道。你甚説的是。

といふ風に記されてゐる。楊志に当る人物はもちろん朱之介であり、梁中書に相当するのは扇谷朝興である。意見を求められて述べる態度も極めて相近い上に、その意見を聴いて受入れる有様も殆んど同じである。又その押送の方法を見るに、美少年録では多人数は怪しまれるから人数は少く、服装は山伏に扮しようといひ、水滸伝ではやはり人数の多いのはいけないし、車も不要である。服装は客人の

様に扮してひそかに送り届けようといふのである。かくの如く見れば水滸伝第十六回と美少年録のこの箇所との関係は判然とするのである。

## 三

以上種々述べた如く、潜在する水滸伝の投影はかなり大きなものがあり、第五十四回、第五十五回、第五十七回、第五十九回、第六十回にわたる種々の点に影響を及ぼしてゐるのである。しかも従来指摘されていたのは、第二十回、第四十一回、第四十二回、及び第五十回であるから、美少年録の後半は非常に水滸伝の影響が多いことになる。これに反して櫛枕間評全伝に拠つてゐた前半は第二十回に部分的影響が認められるのみである。この事實は、早くから説かれてゐた前半後半の作風急変の理由の一つに数へられるべきものではないかと考へるのである。更に後半の阿甍寺に籠る義兵の活躍の物語がこの作品の本筋と離れた独立のものであるかの如き感じがする理由も、又この事實に存するのではないかと思はれる。とにかく、櫛枕間評全伝に拠つた前半に情事が多かつたのは原拠に引ずられたのであると同じやうに、後半一変して活劇が多く武張つた作風になつたのも水滸伝に負ふ所が多であつたからと考へても差支へはなからうと思ふのである。

## 享保五年「心中天の網島」上演に關する諸事實

今日も文楽や歌舞伎で度々上演される「心中天の網島」は享保五年庚子（一七二〇）十二月六日、大阪道頓堀竹本座でその幕を開いた。時に作者近松門左衛門六十八才と称されている。「紙治」「河庄」として知られる本曲は、その後「双扇長柄松」、「中元噺掛鯛」、「置土産今織上布」と諸種の改作を持ち、安永七年に至つて半二の「心中紙屋治兵衛」が北の新地西の芝居に掛つた。その後本作は繰返し各小屋で上演され、途中で増補版「時雨の炬燵」の出現もあつて、近世邦楽年表の記すところでも合計三十六回の多き上つてゐる。此事實は本作が非凡な価値のあるものであり、特に原曲の着想の妙、構成の巧み、文章辭句の流麗を如実に語るものであり、まして今日の上演が殆んど巢林子原典を重視している事を考へる時、享保五年の最初の上演の際の事情を充分明白にして置く事の必要性が痛感される。本稿はこの「天の網島」の周辺にある諸事實を調査したのだが、勿論未だ他に多くの記事が保存されている事と思われるので欠けた点は今後充実する様努力し度い。

享保五年「心中天の網島」上演に關する諸事實

## 浅野 達 三

一 最初は各書に記されている上演の事實である。

外題年鑑の当流竹本筑後掾の部には次の如く記されている。

小春 治兵衛 心中天網島 同年十二月六日

同 上

文大夫又出座

此処で同年とは享保五年庚子のことであり、同上とは作者近松門左衛門のことである。この外題年鑑は宝曆版・明和版・安永版・寛政版と四種あるが、そのうち寛政版のみにこの同上の文字があつて他には見当らない。

又、古今外題年代記の同様箇所には

小は。 治兵衛 心中天網島

同年十二月六日 文大夫又出座

とあり、更に声曲類纂卷之二竹本座浄瑠璃外題の部分には

外題年鑑を増補してこゝに記す。外題の下に月を記すは興行の

初月なり。同書には二度目三度目の興行をしるす。繁ければこゝに略す。  
とあつて

小はる 治兵衛 心中天網島 同十二月 近松作。

文大夫又出座。

の記事がある。

此三冊は近世演劇史の上で貴重な記録を留めるものであり、これらの記載事実は充分正当なものと認められるので上演の事実が確定している事は今更論ずる迄も無い点である。

此處で一寸舐れておき度いのはこの題目の混乱の事である。それは小春が紀の国屋か、紀伊の国屋か、と云うことと、治兵衛と小春と何れが先に書かれているか、と云うことだが、これに就いては先ずその正本の題目を信賴すべきであらう。そこで竹本筑後掾の正本

・山本九兵衛版の七行本に依ると

紙屋治兵衛 心中天網嶋

きいの国や小はる

となつて居り、十行本に於いても

かみや 治兵衛 心中天の網嶋

きいの国や小はる

となつて居り、十行本に於いても、又治兵衛を先に、即ち右に書き、小春を左に書くのが正しいと云うことになる。外題年鑑・古今外題年代記・声曲類纂等の記載はこれに依ると具合が悪いのである。ところが小春は一概に「きいの国や」だとする事も出来ないのは、十行本の本文では「今このしん地に恋衣、きの国やの小春とは」と使われており、表題と内容の文句とでこれだけの差異が認められ

この事に就いては西沢一鳳もその著である西沢文庫脚色余録初篇中の巻、地者心中続きの話に於いて

「天の網島享保壬子年十二月六日より始めて、十月十四日十夜回向の折から死したるが実也。網島大長寺に小春治兵衛の書置あり。それに享保七寅の十月十四日と記せしは寺記の方誤り。かゝる事は戯場の方に証とする事多しとるべし」と記し、七年説の誤りを指摘している。

更にこの実説の一つとして四壁庵茂島は「わすれのこり、下」に「小春治兵衛」として、江戸本町三丁目の家持紙屋治兵衛が年若にまかせ、柳ばしの芸者小春に馴染んだが、金がなくなると小春は忽ち見捨て愛想をつかす。治兵衛はこれを怨み、或日客を送つて帰る小春を両国いがらしの前で刺し殺し、自分は回向院墓場で相果てた、と云うのが実説であり、そしてこのことを浪花のことに書き換えた、と述べているが、全く問題にもするに及ば無い説である。

有名な道行文「走り書」に就いては諸家の色々な意見が見られる。神沢貞幹の随筆集である翁草に

「享保五年の冬、近松翁住吉新家の酒樓に遊びてありし時、俄に大坂より芝居者来り、ゆふべ網島の大長寺に男女の情死あり、何卒速に大坂へ歸りて浄るりに作りて給はらばあす一日の稽古にして明後日より興業せんとてひたすらに頼みければ早駕に乗りて大坂にかへり、かごより下りて其儘に筆をとり、かごにて走りかへりしまゝ書きつけしとて、走り書と書出し、直に謡の本は近衛流、野郎帽子は紫のと書きつけ、道行の外題は思の橋尽しと名

享保五年「心中天の網島」上演に関する諸事実

八六  
る。この点は諸家の全集でも必ずしもそれ程厳密な注意をして居られ無い様である。然し要するに紀の国も紀伊の国も同じ所であり、不用意にあらちらと使つていたものがこんな所にも混乱を来したのであらう。

## 二

心中の実説としては、享保五年十月十四日、大阪曾根崎新地紀の国屋小春と天満御前町紙屋治兵衛とが網島の大長寺の畔で情死した、と云うことで、西沢文庫伝奇作書附録中の巻心中情死人名録にも小春治兵衛の名が見える。

ところが浜松歌国の今古参考南水漫遊拾遺上の巻、頓阿雜事には次の記事がある。

一、享保七年寅十月十四日紙屋治兵衛紀伊国屋小春網島大長寺にて心中

これには享保七年と二年の相違を来して居り、同じく網島の大長寺にある過去帖及び位牌、多分これは後の好事家の作つたものと推察されるものだが、それにも七年とあるそうで、こうなつて来るとどうも話が混乱して来る。然しこの問題に就いては享保七年四月二十二日上演の心中宵更申の文章中に「平家物語か網島の心中本か、どれも読みませう」とあるのに依つて誤りは明瞭である。

西沢文庫伝奇作書後集下の巻、中興世話早見年代記には

丙 丑  
小春治兵衛心中

と享保六年の事としているが、これも矢張り誤つて居る。

づけしは、大坂にはいくらも橋あるを以てしか名付けし、といへり

とあるのに關し、藤井紫影博士は近松全集解題に於いて、例の好事家のこしらへ事、上演までに五十余日も経て居り、走り書にもそんな意味の無い事は本文を見れば明瞭である。今宮心中の「心中たつた今宮」の看板と同一の浮談であると否定され、又守隨憲治博士は帝國文庫（昭和版）解題に於いて、道行文の名作なる余り、作者の名人なる余り、噂が真を生んだのであらうが敢えて保存して面白い話である、とされた。伊藤正雄氏も「心中天の網島詳解」に於いてこれを否定され、「走り書」の句は前段の終りの「足をはかりに」の句を承け、次の「謡の本」を導き出す為の序詞に過ぎ無いらしく、必ずしも作者自身の走り書だと云う意味とも思われぬ、と述べられたが然し又次に、かゝる際物は一日の早きを争ふ性質のものに相違ないから、或は取敢えず道行の部分だけを作つて事件直後に上演し、それより徐ろに全曲の筋立てを案じ、道行の前後の事件を補つて完全な一淨瑠璃に仕立て、一ヶ月なり二ヶ月なり後に日を改めて更に上演したのではないかと云う事も想像されぬではない。そうなるに根拠となる事実はあつたかも知れ無い、とされ、更に又、走り書の文句も単に一夜漬の急作であると云う謙遜の意を作者が此語に寓したと云う解釈ならば一説として成立たぬでも無い、とされている。これは佐々博士の「近松評釈天の網島」の説、後の藤井博士の「近代文芸叢書近松門左衛門」に於ける説とも同様であつて、蓋し妥当のものと思われぬ。

木谷蓬吟氏はこれに就いて大近松全集の解説に於いて、当時興行

中の狂言「近松作、日本武尊吾妻鑑」の中に、「走り書」の道行だけを加えたものだろう、とされているが、これは十二月四日初日で心中当時は未だ本篇の興行は無く、従つてこの説は妥当とは言へ無い。矢張り一日稽古して明後日より興行は多少の誇張とせざるを得ないであろう。然し乍ら真偽の程は扱置き、その才藻をよく物語るものである。

尙西沢一鳳は伝奇作書拾遺中の巻、小春紙治情死の話、近松平安堂作文論の中で

「翌一日の稽古にて明後日より始めんとは近松が頓作を賞んとて素人了簡の詞也、いかになつても節付、木偶のふりもあり、五日と七日とかならずばあら筋の立ものにはあらず、いはんや駕にてはしり歸りしゆゑ走り書語の本は近衛流など書し、といふは後世好家家の抄事也」

と頭から否定している。同じところに、この事柄が南水漫遊にある、と云つてゐるのは一鳳の誤りであつて南水漫遊には何の記事も無く矢張りこれは翁草の記載であろう。

## 四

享保五年竹本座上演当時の出演者はどうかとなると大変なことである。評判記・番附など見得るものは無く、又正本に太夫名の記されているのも少い。只明らかなのは外題年鑑に文太夫又出座とあり、この天の網島上演に際して又出座して語つたことだけは確かである。木谷蓬吟氏は一座太夫の顔触れは竹本政太夫・竹本大和太夫・陸奥茂太夫・竹本文太夫・竹本國太夫であつたらしい、と言われているがもとより臆測に過ぎず、実際に語つたのが誰々かは正確には解ら

ない。只其前後数年間の動きに依つて大体こんなものかと推測出来る程度である。

三味線では天の網島前後の上演には鶴沢友二郎が出てゐる。これは義太夫節三絃の祖竹沢権右衛門の高弟、盲人の鶴沢三二で竹本座の立三味線として一座を率い、享保五年正月友二郎と改めたものである。然し乍ら外題年鑑には享保五年正月国姓爺合戦に三絃鶴沢友二郎とあり、三月の井筒業平河内通も同様、更に六年二月の撰津国夫婦池にも名は出てゐるのに天の網島の項に記載の無い所を見ると矢張りこれも疑問が残る。

人形遣いでは、浄瑠璃譜の記事に依ると正徳五年国姓爺合戦では、「おやま形辰松八郎兵衛、立役人形津山助十郎、同金七、是等名人なれとも、此砌多くさし込手として一人してつかふが定りなり」。

とあり、続いて享保二年国姓爺後日合戦には

「三代前吉田文三郎若年にて、はじめて出勤」とある。これらの内おやま形遣い辰松八郎兵衛は享保年間に江戸へ下つたことになつてゐるので、この天の網島上演の際に居たかどうかは解らない。

竹豊故事巻之下、操人形之故事並名人之遣手付古今達人之事には

「此人古今の達人にて手摺を放れ、無量の手段を遣ふに全身少しも乱るゝ事無し」

と言つてゐる。又吉田文三郎は吉田三郎兵衛の子で、ずつと竹本座に出勤した様だが、竹豊故事同じ条には

「吉田文三郎は古今無双の名人也」

と記されている。

太夫・三味線・人形を通じて当代の人々に就いては、これ以外に

今昔操年代記・古今外題年代記に相当の記事がある。今昔操年代記は享保十二年刊で年代的に天の網島上演に近いから参考になる点が多い。古今外題年代記は宝暦十三年の刊行でや、時代が下る。竹豊故事巻中には名人上手下手三品評判之事として太夫の評があり、同じ記事は西沢文庫伝奇作書統篇上の巻にも名人上手下手評判の事として載せられている。政太夫には播摩少掾となつてからの芸談を集めた竹本播摩少掾音曲口伝書があつて数少い芸論書として興味がある。声曲類纂巻之二には竹本座太夫略伝があり、浪花其末葉女大名東西評林にも若干の關係箇所は見られる。今古参考南水漫遊拾遺五の巻頓阿雜事、同書三の巻操曲評書の浪華の蘆には夫々友治郎・文三郎の名があり、更に竹豊故事巻之下浄瑠璃古今之序並當時の太夫名人之評にも種々の記事があるが、これらの引用は余りにも煩雜にわたり、又その割に本稿との關係も密接でないと思われるので、此処では単に記事のある箇所を指摘するだけに留めておき度い。

## 五

此頃の人形と舞台装置はどうであつたか。人形の方に於ける進歩として土偶から木偶になり、やがて人形に足がついた、と云う様な事は声曲類纂に記されているが、更に此時代になつての進歩は浄瑠璃譜に依ると竹本座の分だけでも次の如くである。

正徳五年国姓爺合戦で

「此砌多くさし込手として一人してつかふが定りなり」

享保二年の国姓爺後日合戦では舞台装置に就いて

「此時舞台大幕の上に小幕をはじめて引」

享保五年「心中天の網島」上演に関する諸事実

享保九年の関八州駿馬では

「右浄瑠璃一枚看板。京大文字山のてい。四段目の道具。奥をひらけば一面の山。大文字の道具建見事也」

大坂享保の大火の出火に就いてこの浄瑠璃が縁起が悪いと言われたのは有名なことである。

享保十年の大内裏大友真鳥では

「是四段目兼道の身替り。古今の趣向とて大当り也」

享保十九年の応神天皇八白幡では

「是より新浄瑠璃業平河内通ひ。蘆屋道満大内鑑杯は。人形遣ひはなはだ上手となり。与勘平彌勘平の人形は左足を外人につかはせ。人形の腹働くやうに拵始めし也。是を操り三人懸の始と云ふ」

愈々この時から今見る如き三人遣いが出て来た訳である。斯様に天の網島前後僅かの期間に相当の進歩が見られ、義太夫劇の舞台は日進月歩の改良を続けていた事が判明する。

これに就いては興行界の逸物竹田出雲が元禄十六年曾根崎心中上演後の竹本座に座元となつてその経営を担当し、竹田からくりの応用で舞台技巧に新鮮な工夫をこらして人気を呼び、又豊富な財力から人形の改善を行つた事などが大いに与つて力があろう。浄瑠璃譜四には

「是より竹田出雲。竹本芝居の座元となり。人形衣裳道具まです。りつばになりし也」

と此事に就いて述べてゐる。

尙寛政十二年上梓の劇場築屋図会、享和二年の同拾遺も、数少い

義太夫劇の演劇的な解説書として参考にすべきものである。

## 六

関西の主要な図書館に所蔵されている天の網島の院本は次の如くである。

○天理図書館蔵 七行本 四十三枚  
裏表紙の中側迄がつしり書かれてあり、最後に次の三行がある。

竹本筑後掾

正本屋 山本九兵衛板

大阪高麗橋寺丁目 山本九右衛門板

これだけで奥附も何も無い。非常に簡略な形式である。近松の七行本は正徳元年九月の「吉野都女櫛」にはじまることは宝暦版外題年鑑の次の記事に明かである。

「此浄瑠璃を大字七行本に刊行す。丸本七行本の始なり。爾来これより以前の当り作をも七行本に再版す」

そしてこれに依り以後多く出版された七行本には「偽の七行正本が出てゐるがそれらは誤りが多いから、今自分が出すのは予が直の正本である。」旨の識語が奥附にあるのが普通である。然し本書にはそれが見られ無い。

○天理図書館蔵 十行本 二十四枚

奥附無し。樂庭文庫の印あり。

○大阪府立図書館蔵 十行本 二十四枚

奥附は 右此本若以太夫直伝写

之頌句音節墨譜等不殘

幕厘令校合候畢尤加秘

更に若干余談の様になるが、最後に次の記事を附け加えて置き度

西沢文庫脚色余談初編中の巻

心中尽道行の文句、の一部

「心中天の網島曾根崎川庄の段にてなまいだ坊主てんがう念仏を唱へてくる乞食有、是は飄箆するし志道軒の如きの者也、歌舞伎狂言のべの書置には此坊主より思ひ附石町の隠居本名伝海坊とて紙屋の内へちよんがれをいひくるに仕組たり」。

野辺の書置は桜田治助に依つて書かれ、富本節の正本集・桜草集におさめられている。

密全令開板者也

京二条通寺町西へ入町

鶴屋喜右衛門板

鶴屋板と言われるものである。筆でこの書の最初の購入者が享保十一丙午三月十三日求之と書いている。

○京都大学図書館蔵 十行本 二十四枚

奥附は

我等かたり本の通ちがひなく写させ進し候此外口伝とてさのみむつかしき事もなく候たゞ人乃心を慰るを秘伝にいたし候しかしふし付は作意と文句のはだゑが大事に而候秘事はまつげとや かしく 山本九兵衛板

十行本で山本九兵衛板のものは概ねこの形式に則つてゐる様である。たゞこれが大阪出版の形式になると更に先の七行本の如く山本の大阪出店、山本九右衛門の名が加わる。

この外最最近天理図書館には更に十行本・七行本各一冊がある旨だがまだ見ていない。尙東京大学国語研究室に山本九兵衛板の十行本、同国文研究室に七行本が所蔵されている。

## 七

この天の網島上演に就いての評判としては西沢文庫伝奇作書続篇上の巻に浄瑠璃東西外題番付として天明年間に相撲番附の如く作られたものの写しが載つてゐるが、それに依ると西方勸進元、竹本の前頭の丁度中頃に本曲の名が見える。若しこれが確實な人気の程を示すものであれば先ず普通程度と言つたところであらうか。但しこれが原作か、改作の分か、その何れかは判明しない。